

# 會



# 報

1963年12月

230

日本山岳会

## 西穂高ケーブル問題と

## 上高地の支部長会議

の討議が行なわれた。

須賀東海支部長、

石岡委員より詳細な説明と、自然保護に

紅葉の峠にちょっと早い十月五日、上高地の山荘で支部長会議を開催した。会議は午後四時から五千尺旅館で開かれるので、朝、会の山荘に着いた会員は西穂高や徳本峠へ遊びに出かけた。幸いに快晴でそれぞれ秋の上高地のよさを満喫することができた。

出席者は松方、三田正副会長が

出られなかったが、東京から折井、山崎、辰沼、松田の各理事、日高、神谷各評議員、野口、松本監事それに小生。支部は東京から石原、村井、東海から須賀、石岡、富山から木津、静岡から牧野、秋田から柴田、関西から津田、長野、越後から前島、石川から池田、信濃から高山、小里、赤羽、清水、塚原、村上の各支部長及び役員で、それにゲストとして上高地レンジャーの沢田氏も出席され、五千尺の大広間はなかなか賑やか。

議事は、各支部からの近況報告に引きつづいて辰沼理事から一九六六年エヴェレスト登山計画に関する説明があり、各支部長の支援を懇請しこれを諒とした。つづいて東海支部から提案された西穂高岳ロープウェイ建設計画について

どについて検討されたが、全員一致で西穂高岳ロープウェイ及び上高地スカイライン道路（鍋冠山より大滝山、徳本峠北面をへて上高地に至るもの）の建設と延長には支部長会議の名において反対を決議、会内に自然保護に関する委員会を設置して、反対運動を強く推し進めることを申合わせた。

東海支部において作成された反対意見書を基礎に改めて山岳会としての決議文なり要望書を起草し、運輸、厚生、文部、建設などの各関係官庁をはじめ広く一般に呼びかけることになったので、十一月の理事会でもその旨報告、自然保護の立場から支部長会議の決議を承認。とりあえず近く開かれる自然保護協会の理事会に提出する要望書を作成、更に資料をそえて関係方面に強く呼びかけることをきめた。（要望書全文下記の通り）

支部長会議第二日は、前日同様の快晴、山荘で懇談の後、解散。それぞれ秋の山を楽しむに出かけた。開催に当たっているお骨折願った高山支部長はじめ信濃支部の方々、会議場を提供された五千尺の御厚意に、御礼を申しあげておく。（渡辺記）

## 要

## 望

## 書

近來観光資源、電源資源開発の名の下に、我々が後世に伝えるべき貴重な我が国の自然が全国の各地域、甚だしきは国立公園内においてさへ著るしく破壊されつつある。

一度失われ、破壊された自然は再びもとの姿に戻すことは不可能であり、また仮に復し得るとしても、数百年の歳月を要するにもかかわらず、自然破壊行為は依然として進行しつつある。

北アルプス西穂高岳にロープウェイを建設し、岐阜県蒲田深谷と上高地とを結ぶとする計画も利益追求を目的とする観光資本の進出であって、我々は自然保護の立場から、この計画に強く反対せざるを得ず、去る十月五日上高地にて開催した本会の全国支部長会議の席上においても、その反対を決議したのである。

周知の如く上高地は我が国において、他に類を求めることの出来ない特徴ある自然景観から成り、西穂高岳はその重要な構成部分の一つである。

特に上高地が中部山岳国立公園の中においても重要な特別地域に指定されていることからみて、ロープウェイの建設に

より西穂高岳、ひいては上高地の比類なき自然を破壊することに反対するのは、美しき国土を愛する国民の一人として当然の責務であると考え、鍋冠山から徳本峠北面を経て、上高地に至る車道、或いは富士山のロープウェイ建設計画等についても

同様の立場から反対せざるを得ない。山岳、自然の愛好者とは、より、広く国民に訴えて、自然破壊的な施設反対の運動を強力に展開すると同時に、関係各官庁をはじめ民間諸団体、機関の適正なる措置と御協力を切望してやまないものである。

昭和卅八年十月三十日

社団法人 日本山岳会

◇

◇

この要望書は、十一月六日開催の日本自然保護協会理事会に、取り敢えず提出された。西穂高岳ロープウェイ反対決議の徹底声明が、急を要した故である。厚生省国定公園部長は、村井が口頭で伝達した。既に文部省文化財保護委員会でも、同問題反対が決議された。松方会長の帰朝後、一月廿三日、日本山岳会の自然保護委員会の打合せが行われ、各方面に働きかける準備を進めている。（村井記）

## 海外遠征だより



## 同志社大隊

## サイバル登頂

## 平林 克敏

## ◆第四信

(十月十四日付C・2にて)  
サイバル登頂の唯一のルート  
(十月一日発見の南尾根ルート)  
は思ったより悪く、隊員総出でル  
ート工作に当り、今日迄に南尾根  
の岩稜にC・2を建設し、C・3  
のルート工作に当たっています。

南稜に取付く一、二〇〇mの水  
壁はともかく、この南尾根の稜線  
上にはキャンプ地なく、C・2は  
ジュラルミンの梯子とフィックス  
用アイス・バーを利用して岩欄上



に二人用天幕二張を建設、目下C  
・2より板状の岩稜とナイフ・リ  
ッヂを頂上に向けルート工作中  
で、今日迄に六、三〇〇m迄達し  
ました。この上部は更に悪く、ノ  
コギリの歯の岩稜はケイブルをか  
けて往復する様にしています。  
あと一週間て冬の足音がきそ  
うです。日ざしが十月十日以降め  
きり弱まり、インド平原から吹き  
上げていた風が昨日からチベット

側から吹いてきています。この風  
は遠くドウラギリ、アンナプル  
ナ、西にアビ、ナンダデヴィーの  
南面にかけている雲を南面に吹  
き流し、長い尾を引いてインドの  
空に流れています。(ジェット・  
ストリームの様でもあります) サ  
イバルも同様で、十月に入ってから  
は一日も晴れた日はなく、夕方  
にはインドの平原より黒雲が押し  
よせて南面をおおいますが、北風  
がこれを強くさそっています。  
この調和はあと一週間は続くもの  
と観測しています。この後に十日  
程、すばらしい秋の天気が続く事

でしょう。しかしその天気は山登  
りにはあまりに寒すぎます。

シェルパの動きがC・2以上で  
悪く、隊員にかかる負担が大きく  
心配していますが南尾根の難所は  
あと一週間てこせそうです。

## ◆第五信

(十月二十四日付B・Cにて)

サイバル登頂に成功しました。  
十月二十一日、六、四〇〇mのC  
・4より、ノコギリ歯の岩稜にル  
ートを開くべく、パサンと平林の  
二人は、この岩稜に取付き、九  
時、この岩稜のいただきに立ちま  
した。十一時には西南稜の合流点  
に達しました。この附近はなだら  
かな大雪原。このとき、ガスが一時  
吹きとびサイバルの頂を間近に  
みることができました。雪原は東  
北にのびる尾根に続いており、そ  
のさき、ちょうど三〇〇mほどの  
ところに、まるでインドの寺院の  
丸い屋根の様なサイバルの頂があ  
りました。

十一時三十分無線にて第一キャ  
ンプに「われわれは頂上直下にあ  
り、登頂を決定する。あと三分  
で頂上に立つ」旨報告しました。

いただきの北側は風化され、岩  
の絶壁となり、南から細い尾根が  
ついており、この尾根に登り、十  
二時五分ついに頂上にたちまし  
た。だきあったパサンの肩のむこ  
うに灰色のチベット高原がひろが  
り、聖山カイラスの白い姿と、聖  
湖マナサロワルの線が美しく光っ

ているのが印象に残りました。用  
意してきた国旗をとりだし、パサ  
ンと交互に何枚も写真をとしまし  
た。

頂上より、「登頂成功」の報を  
無線でC・1の隊長に報告し、三  
十分を頂上ですごした後下山の途  
につきました。

## ◆第六信(ダイレックにて十一月二十八日付)

サイバルを十月二十一日に登頂  
してから、すでに四十日余り、ネ  
パール・ガンジを目指してキャラ  
バンをつづけています。

タルコットからジュムラへの道  
では三、四〇〇mの峠で雪に降ら  
れて苦勞しました。二名の隊員は  
ムグからボバを廻りボカラにく  
る事になっていますが、我々はカ  
ンジロバ山群に入るためジュムラ  
にきました。途中の峠が二米の積  
雪でクレーリが動かず、ボカラ行  
をあきらめダイレック経由ネパ  
ール・ガンジへ下っています。

今回の調査は主としてジュムラ  
の産業地理とマラ王朝の調査をし  
ながら歩いておられます。

これからシワリック・パスを越  
えてネパール・ガンジに出、そこ  
からチャーターの飛行機でボカラ  
に行き、ツクチェ迄北廻り隊を迎  
えに行き、十二月二十八日頃半年  
の遠征を終えて帰途につきます。  
詳しくは帰りましたから御報告  
致します。会の皆様に宜しく。  
(第四信、第六信は松田宛、)

エヴェレスト隊シェルパ  
来日の件

今年のアメリカ・エヴェレスト  
登山隊に参加したシェルパの中、  
最高キャンプの荷上げを行ったシ  
ェルパ五名並びにリェン・オフ  
イサーは、ディレンフルト隊長に  
招待されて一ヶ月間アメリカ各地  
を旅行した。その帰途一行は、リ  
ェン・オフイサー、キャプテ  
ン・ラナに引率され九月一日早朝  
羽田着、ホテル・ニュージャパン  
に落ちつき、二泊して東京の休日  
を楽しんだ。

来日したシェルパはナワン・ゴ  
ムブ(H・M・I・インストラク  
ター)、アングワ・四号(第三次  
マナスル、ヒマルチュリに参加)  
ニマ・テンシン(福岡大ガウリサ  
ンカール隊に参加)、イラ・ツェリ  
ン(一九六二年ジュガル隊参  
加)、ギルミ・ドルジュの五名で、  
日本隊とも馴染みの深いシェルパ  
が多かった。遠征当時の話に花  
が咲いた。

当日は午後、山崎、松田、木村  
竹田、高橋、茂野等がJACのル  
ームへ案内し、その後、田辺の案  
内で三越デパートを見学した。

翌二日は、彼等の希望もあって  
午前中は日本光学、午後は江の  
島 鎌倉に案内した。一行は鎌倉  
の大仏には感心し、特に江の島マ  
リン・ランドのイルカの曲芸が気  
にいった様子であった。一行は、  
この日の夕刻新橋第一ホテルの白  
楽天に於ける歓迎会に出席した。  
この歓迎会は急な来日のため連絡  
が困難であったにも拘らず多数の  
ヒマラヤ・メンバーが集まり、ま

第五信は産経新聞十一月十二日記事よりアレンジした

## 都立大・大阪府大合同隊

### シャルプ峰初登頂

広谷 精 啓

シャルプ登頂に成功しました。ベース・キャンプに着いて以来、好天続きで全員休みなしの行動にて、十月十八日C・2（五、九〇m）を設置しました。C・2の目の前にはシャルプ主峰南壁が、一、五〇〇m位の高度差で立ちはだかっており、C・2迄くるとジョンソン・ピーク、アウトワイヤ、その左にラシャルの二峰、二峰も姿をみせてきます。



登路図・筆者

C・2よりC・3は一番の難所で、ルートはC・2より氷河沿いに登り、この氷河が主峰南壁に消えるところにある大きな雪原（プラトと呼んだ）にて、このプラトより西尾根のゴルにでる。西尾根のゴルにC・3（六、五〇〇m）を設置したが、このゴルへの登りは、急な所で七〇度もある岩

と氷のまじった急斜面で、ここに四五〇mのフィックスを張り置いた。このゴルに立つと今まで見えなかったエヴェレスト、マカールの巨峰、更にチャムランも雲海の中に見える。

C・3よりのルートは西尾根が困難のため、主峰西壁の間を縫って西北稜に出ましたが、この間は胸がつかえるばかりの雪壁、氷壁であり、丹念にステップを切り、二〇〇mのフィックスを張り置いた。西北稜が西尾根に合するまではだだっ広い尾根だが、そこからナイフリッジとなり、やがて白いドームが現われ、頂上となります。頂上の標高は七、二〇〇m。第一次登頂隊三名、十月二十二日の十二時五〇分頂に立ち、ついで翌二十三日第二次隊五名（隊員三名とシエルバ二名）、更に十月二十五日第三次隊六名（隊員四名とシエルバ二名）と、全隊員、シエルバが登頂に成功しました。これからは四隊に分れて

①ヤルン氷河  
②アラウンド・シャルプ  
③カンチエンジュンガ氷河  
④ローナク氷河、チシマ氷河を調査し、十一月二十日二隊に分れ帰国の途につきます。一隊は広谷以下六名で十二月中旬に帰国、他の一隊（平野、石鍋、宮本、森）はナムチェ・バザールを中心に調査をつづけ、カトマンズを経て三月中旬に帰国の予定です。

まずはとりあえず登頂の報告まで。会の皆様によるしく。

（十一月五日付カンパチエンのB・Cにて 松田宛）

## 北大西ネパール遠征隊

### 通信（第三信）

安藤 久 男

九月二十二日、シミコートにつきました。ジユムラからシミコトまでは、部落ごとにクリーリを変えなければなりません。この地域（ジユムラ・ディストリクト）の習慣として、隣村までしか荷物は運ばないことになっているそうです。その代り旅人に食糧とクリーリを提供する義務があります。われわれは一日に三度もクリーリを変えながら進みました。ジユムラからは四十二個の荷物が進んでいます。この地域を歩くには四十二個でも多く、一つの部落でクリーリを集めるのは中々困難です。シミコートの手前、四〇〇〇メートルの峠で、ナラカンカールを眺めることが出来ました。双峰のシャープな山です。大体チベットの国境の山は皆ヨーロッパ・アルプスのように尖峰状をなし、雪が少なく、岩峰が多いようです。けれども、シミコートの部落民の話ではナラカンカールはチベット側にはゆるい傾斜を作り、登るのがイージーだそうです。

シミコートは素晴らしい村です。一〇、三〇〇フィートの高さを持ち、ハンギング・グレイシャーの見える山々を背後にひかえた丘陵地にあります。もう一週間位前にモンズーンはあけたらしく、雲一つない青空の下でキャンプを張っています。四十日余りのキャラバンの苦勞は忘れてしまっています。シミコートから国境の町「中共領、コジャルナート」まで四日です。このあたりのクリーリは、チベットで買った中共製のセーターや靴をはき、話題の多くは中共のことです。われわれも中国人と似ているらしく、これから先き亡命チベット人におそわれるのを防ぐため、シエルバに日本人が山登りに行くと云うことを、ふれさす必要があります。ここシミコートは、ネパールにとって最後の要地です。パスポートを調べるチェックポストがあり、政府の役人が常駐し、またインド人の役人も常駐しています。ジユムラからは、クリーリ集めのためポリスが一人同行しています。シミコートからはヤクかゾーで進みます。BCまで一週間余りで、九月中旬にBCにつく予定です。天気が良いすぎて、もうキャラバンにはもったいない気がします。登攀日まで、この天気が続くことを願っています。（シミコトにて、木崎甲子郎宛、十月三十一日受信）

（カットは同志社大通信のシール）

ことに楽しい一夜であった。この後、ルムでジュガル・ヒマールの記録映画を観賞した後東京での第二夜を送り翌三日、午後二時一行は次の寄港地 香港へ向け離日した。

〔歓迎会出席者〕 ラナ大尉、ナワン・ゴム、アン・ダワ、ニマ・テンシン、イラ・ツェニン、ブルミ・ドルジ、植有恒、松方三郎、日高信六郎、三田幸夫、佐藤久一郎、深田久弥、吉沢一郎、加藤泰安、折井健一、山崎安治、辰沼広吉、村木調次郎、日下実、片桐理一郎、山野井武夫、竹田寛次、木村勝久、田村扇一、杉浦耀子、芳野超夫、松田雄一、春田俊郎、沼田真、松尾安、石坂昭二郎、平山善吉、堀川英司郎、田中源治、高橋照、秋山正人、高島誠、安久一成、茂野徹太郎、山田隆保、以上四十名。（松田）

## 本号 目次

- ・西穂ケイブル問題と支部長会議……………一
- ・要望書……………二
- ・サイバル初登頂……………二
- ・シャルプ初登頂……………三
- ・北大隊西ネパール遠征隊通信……………三
- ・米軍隊のシエルバ来日の件……………四
- ・アイガー北壁の完登表……………四
- ・第6回紅葉会……………五
- ・年次晩餐会……………六
- ・志賀重昂記念「この一本展」……………六
- ・クリ紹介……………八
- ・図書紹介……………八
- ・続飯豊あちこち……………一〇
- ・十月の早池峯山……………一一
- ・沼井鉄太郎遺稿⑩……………一二
- ◆会務報告……………一二
- ・ルム来室者名簿から……………一四

# ■アイガー北壁の完登表 吉沢 一郎

アルプスに残されていた最後の難所、アイガーの北壁も、昨年の九月までに四一回完登されている。ハラーの「白い蜘蛛」の最後に一覽表がついているが、これもヒューラーの書によるもので、どこに誤りがあるようだし、今年のディ・アルペン（一月及び九月）にもこれに関する表及び修正が出ていた。私は右等の文献を総合して別表のようなものをつくってみた。ひょっとした時の参考にもなれば幸いである。

- 1) 21-24.7.1938: Andreas Heckmair, Ludwig Vörg, Fritz Kasperek and Heinrich Harrer.
- 2) 14-16.7.1947: Lionel Terray, Louis Lachenal.
- 3) 4-5.8.1947: Gottfried Jermann, Karl Schlunegger, Hans Schlunegger.
- 4) 26. 7.1950: Erich Waschak and Leo Forstenlechner. (18時間)
- 5) 25-27.7.1950: Jean Fuchs, Raymond Monney, Marcel Hamel and Robert Seiler.
- 6) 22-23.7.1952: Pierre Julien and Maurice Coutin.
- 7) 26-27.7.1952: Karl Winter and Sepp Larch.
- 8) 27-29.7.1952: Hermann Buhl, Sepp Jöchler.
- Sepp Maag, Otto Maag.

- : Jean Bruneau, Guilo Magrone.
- : Paul Habran with Gaston Rébuffat, Pierre Leroux.
- 9) 6-8.8.1952: Erich Vains, Hans Ralay, Karl Lugmayer.
- 10) 14-15.8.1952: Karl Blach, Jürgen Wellenkamp.
- 11) 15-16.8.1952: Karl Reiss, Siegfried Jungmeier.
- 12) 26-27.8.1952: Albert Hirschbichler, Erhard Riedl.
- 13) 20-22.8.1953: Uly Wess, Heinz Gonda.
- 14) 3-11.8.1957: Günther Noldurft, Franz Mayer.
- 15) 5-6.8.1958: Kurt Dienherger, Wolfgang Stefan.
- 16) 10-13.8.1959: Lucas Albrecht, Adolf Derungs.
- 17) 30-31.8.1959: Robert Stieger, Hans Glühelner.
- 18) 13-14.9.1959: Peter Diener, Ernst Forrer.
- 19) 6-12.3.1961: Toni Hiebel, Walter Almburger, Toni Kinshofer, Anderl Mannhardt. (最初の冬期登攀)
- 20) 30.8.2-9.1961: R. Kuehar, Z. Zibim.
- 21) 31.8.2-9.1961: L. Schluneger, Alois Strickler, S. Biel, J. Motowski, K. Gruter, S. Hawyler.
- 22) 19-22.9.1961: K. Freshner, H. Wagner, G. Huber, G. Meyer.

- 23) 23-24.9.1961: H. von Allmen, U. Hurlimann.
- 24) 26-29.9.1961: E. Streng, R. Troier.
- 25) 24-26.7.1962: Jean Braun, Michael Zuckschwert, Bernhard Meier, Andre Meier.
- 26) 1-4.8.1962: Helmut Draehler, Walter Gstrein.
- 27) 12-15.8.1962: Walter Almburger (2回完登), A. Weisseneisner, Klaus Hoi, Hugo Stelzig.
- 28) 11-16.8.1962: Pietro Agutapace, Franco Solina, Arnando Aste.
- 29) 12-16.8.1962: Andrea Mellano, Romano Perego, Cinto Arioldi. (途中第28回と合流)
- 30) 19-22.8.1962: Franz Jauch, Josef Jauch, Franz Gnos, Josef Zurluh.
- 31) 19-22.8.1962: Spitzenstätter, Widmann. (Gstreiner)
- 32) 19-23.8.1962: Hans Hauser, Niklaus Rafanowitsch.
- 33) 20-23.8.1962: Konrad Kirch, John Harlin. (USA)
- 34) 28-29.8.1962: Paul Etter, Martin Epp.
- 35) 27-29.8.1962: Chris Bonington, Ian Clough.
- 36) 27-28.8.1962: Paul Jenny, Werner Hausher.
- 37) 31 (?) 8.1962: Erich Friedrich, Arnold Heinen. (17時間・最短記録)
- 38) 2-6.9.1962: Fredi Brunner, Edi Brunner.

1963. 29-31.8. (Seb) Erich Friedli, Noldi Heynen  
29-31.8. (Öst, Br) Max Friedwagner, Friedmann Schickler, Doudel Heston, Robert Billie.

- 1963. August 2-3. Michel Darbellay. 19時間. (最初の単独登攀)
- × 単独登攀試登者: Adi Mayr (1961), R. Mackart (1962), Adolf Derungs (1962) - 16 回目の完登者。
- 1963. Dec. 31. (最初の下降): Paul Etter (34 回目の完登者), Juli Gantlerben, Sepp Henkel (8 月の Spain 隊の2週休を発見し下ろそうとしたが落してしまった。)

Compiled by Ichiro Yoshizawa, Reference books:

- 1) Heinrich Harrer's "The White Spider", London, 1959.
- 2) Toni Hiebel's "North Face in Winter", London, 1962.
- 3) "Die Alpen", 1963, (1.9)
- 4) "登山", 38 年 8 月 (朝日文庫)
- 5) "山と溪谷", 38 年 11 月 (近藤等、大倉、服部座談会)

(注) ● は特別のもの  
完登は残念ながら出来なかったが、おれはやはり 1963 年 8 月に行われた服部謙彦、大倉大六両君の勇戦山頂直前記録を忘れることが出来ない。

6-8 日、「第一雪山」(2800 m)より退却、11-12 日、つばめの巣より退却、両方とも悪天のため。途中 Spain 隊に追越されたが、これは 2 人とも遭難、Eiger 北壁は日本の岩場の最高の技術で登攀可能、あとは Speed と天候ということになるらしい。

Eiger 北壁に残された初ものは「女性による完登」(途中までは登っている)である。

この北壁完登表を見て、こいつもか、あれもか、と今更ながら登攀者の名を見直している方もあると思う。私もその一人である。「この中にある名前について知るところを記せ」とやったら上級山岳学校の入学試験問題になりそうである。

## い め ん ぐ (シャルンペ登頂)

寒冷の候益々御健勝のことと慶賀の至りに存じます。

あつ、先般東京都立・大阪府立大学合同東部ネパール学術調査隊出発に当たりましては一方ならぬ御援助を頂き、お蔭に一同去年八月末日羽田を出発致しました。其後印度ネパールのターランでキャランを募集しつゝ出発、十月十二日に最終部着カンペン・モンに到着いたしました。

幸に天候にも恵まれて十月二十二日より三日間にシャルン峰(七二〇〇米)に全員登頂の輝しい成果をあげることが出来た事を御報告申上げ、併せて本計画以来多大の御指導御援助を頂きました事を厚く御礼申上ります。

尚隊員は学術調査のため、半数は本年未だ、後半数は来年二月にカトマンズに帰国後、後援の支援により帰国する。

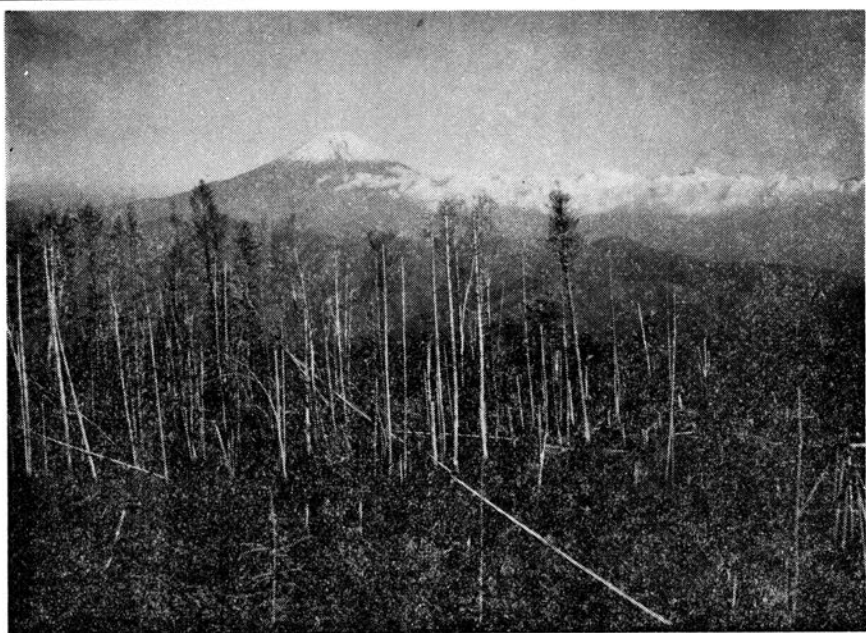
昭和三十八年十二月

都立府立合同東部  
ネパール学術調査隊  
隊長 石原憲治



## 第 6 回

## 紅葉会

日本山岳会  
静岡県支部

七面山頂上から見た富士山

1963. 11. 10 PM 3.30

野口末延

・とき 昭和38年11月9・10日  
・ところ 梅ヶ島温泉梅蕉楼  
・山行 ①安倍峠越、②八紘嶺

から七面山へ、③大谷崩から山伏  
山へ。

早いもので、会名は変更しましたが、静岡県支部の「もみじ会」も六回目を迎えました。六年間に、南アルプス南部も大きく変りました。最初は地元支部員の懇親会のつもりで開催しましたが、東京からの会員の出席が次第にふえて、昨年は総員百名となり、世話する現地でうれしいヒメイをあげる始末でしたので、本年は参加者をぐっと締めましたが、結局五十名になってしまいました。

寸又川に温泉宿が八軒も営業を開始したし、来年は井川の畑に十五軒ほどの温泉宿が実現するそうです。すでに井川観光で二百名収容の赤石ロッジも営業中です。本年で「もみじ会」も終りとする予定でしたが、どうもまだまだ続けなければならぬようです。

「熊肉を喰う会」・「なめこを喰う会」・「山菜を食べる会」等々、各支部でも大分活発な会合が開かれるようになったことは、静岡県支部としても大いに気を良くしています。

今回を以て最終回のつもりでしたが、どうせ続けるなら来年からは新しい企画で、参加者は必ず10分づつ、何の話でも良いからしなくてはいけないことにしたらと思っています。

(山本朋三郎)

△参加者氏名▽  
日高信六郎、藤島敏男、望月達夫、中村謙、山崎金次郎、小野利次、鈴木英一、松本義夫、松本熊次郎、神谷恭、牧野衛、朝井一男、野口末延、原田幹市、田口三郎助、池田光二、古沢肇 (以上東京)

石間信夫、内藤正広、水野公男、柴田昌亮、竹端節次、鈴木璋一、萩野恭一、長田義則、青島秀夫、川端信治、山本朋三郎、岩永安雄、杉山晴信、市野弘、杉山正洋、小林義則、山本剛、深野正雄、林あや子、森まつ、恵良英年 (以上静岡)

池谷令一(県観光課長)、沖和雄(同補佐)、山本覚(係長)、西村雅夫(同)、石上謹治(同)

滝浪善一(井川村山岳会長)、海野利道(井川村教育委員会、梅ヶ島村収入役、同村議会議長、他吏員一以上四十八名)

大谷崩  
山伏山

梅蕉楼鴨鳴山荘の夕は肉の焼ける香と高談爆笑とが相交って賑やかに過ぎた。翌朝は澄んだ秋の空、早立ちの八紘嶺から七面山組につづいて安倍峠越えの組を送ったのち、昼すぎに下る人々に見送られてバスにのり新田に向ったのは藤島敏男、松本義夫両君と昨夜同行を申込んだ古沢、日高の両人、井川村の滝浪山岳会長と海野利道君それに静岡の岩永安雄君がサーダーとシエル役をとめて下った。

新田のさきから歩き出して大谷崩れのガレを登るころには霧が湧き出した。新澤乗越で焚火をして弁当を使っている間に藤島岩永組は大谷嶺まで往復するという張りきり振り。ここから峯つたいに山伏の広い頂上につくまで雲の間に赤石岳や笹ヶ岳、七面山の方面が見え、東の十枚岳が眼立つ。この辺から夕暗が迫って、おそい日高古沢組が三尺峠の林業小舎にいたのは十時半になってしまったが、口だけは達者で先着組と駄弁り年らライスカレーをむさぼり、新田に夢を結んだ。翌朝は小河内川の谷をへだて、仰ぐ山の頂に霧水が輝いていた。また緩線をつたい笹山から井川峠に出て岩崎に下り、バスをつかまえて静岡へ戻った。紅葉には遅かったが、大谷崩で二三組のほかだれにも会わず静かな二日の山旅を楽しんだ。

(日高生)

▽第二五回小集会  
(現地・越後支部担当)

十一月二十三日、高須翁の展墓を兼ねて、長岡八方台国民宿舎で開催、JAC関係六十一名、一般参加者三十名、計九十一名、長岡恒例の「なめこ祭り」を楽しむ。

翌十四日は銀山湖見学、大湯温泉で更に会合をもち、報告や、意見の交換を行い二日間の日程を終った。(詳細報告次号)

# 年・次・晩・さん・会 の 記

十二月三日午後六時から茗溪会館で一九六三年の年次晩さん会を開いた。今年は山岳会の大先輩志賀重昂先生の百年祭に当るので図書委員会では昨年の晩さん会に引き続き「この一本展」を会場で開催、先生の著書、書簡、筆跡、それに先生愛用の旅行用バッグなどまで展示された。

小林深田両会員をはじめ図書委員のお骨折によって「日本風景論」はもとより先生のあらゆる著書や珍しい筆跡などが集められ図書展としても堂々たるものであった。

藤島評議員が今年限りという条件つきで昨年に続き名司会をつとめ、松方会長、近藤、冠岡名誉会員などの挨拶、恒例の招待者海外遠征隊各隊からの簡単な報告などがあり、最後に先生の御息志賀富士男氏の謝辞があり、外は氷雨降る寒い夜であったが、左記の如く地方からも珍しい会員が多く集まったので、定刻まで時の移るのを忘れて山や人の話に楽しい一夜を送った。

なお閉会の挨拶で松方会長は自然保護の問題について本会の志向を明らかにし、会員の協力を求めた。

△出席者名▽

辰沼吉吉、小方全弘、小里頼忠、川須磨子、鈴木郭之、今井雄二、伊

倉剛二、川崎隆章、近藤信行、大橋晋、松江喜盛、油谷次康、藤島敏男、山崎安治、松本熊次郎、村井米子、谷口現吉、植有恒、藤井運平、



— 近藤名誉会員のあいさつ —  
Dec. 3, 1963 撮影 牧 野 衛

夫 近藤茂吉、佐藤隆太郎、皆川完一、山本久子、吉原悠子、冠松次郎、芳野菊子、早川義郎、茶谷東海、松方三郎、金坂一郎、斎藤清太郎、野口末延、尹官炳、小島哲、小島和彦、工業英司、今西錦司、中保、吉沢一郎、渡辺操、吉阪隆正、斎藤健治、田辺主計、美坂哲男、伊

深田久弥、中田勇吉、百瀬舜太郎、三田幸夫、佐藤久一朗、藤原武夫、安彦六郎、小林義正、高木菊三郎、高橋照、千葉重美、志賀富士男、山野井武夫、山本明三郎、織内信彦、中村謙、高橋進、鈴木昭、荻野和

藤敵、原田幹市、金井健二、水口一義、竹田寛次、岡村治信、望月達夫、武藤晃、名須川浩、奥川雪江、三浦多美子、武田育子、中里巖、浜田一馬、坂本矩祥、池田光二、大塚弘介、堀川英司郎、渡辺文明、進藤

波男、河村栄一、長沼真澄、塚越雅則、鶴岡元之助、畦地照雄、倉内辰郎、篠田軍治、田崎隆元、春田俊郎、小原勝郎、須賀太郎、菰田快、深堀鉄男、篠田一郎、折井健一、諸岡一、鈴木一元、田口二郎、神谷恭、岡義雄、柴田均二、小浜浩三、広羽清、須田紀子、川森左智子、田村扇一、石原達夫、山本良三、山下潔、東根親男、沼倉寛二郎、坂倉登喜子、渡辺兵力、宮沢憲、芳野起夫、古沢肇、豊田寿夫、飯田誠、河野幾雄、鈴木英一、小沢武磨、岡本丈夫、長谷部昭久、渡辺公平、陳光漢、増田洋子、桜井信雄、杉浦耀子、鈴木和信、岩崎京二郎、西方芳太郎、細川沙多子、嶋田晃一郎、加藤元一、今井嘉道、見学玄、東京理科大、芳賀孝郎、田島汎、吉武正子、松田雄一、加藤数功、杉山孝、山下一夫、宮下秀樹、佐竹鏡一、森本智津子、牧野衛、石原憲治、松田柳子、日高信六郎、沼田真、勝田房治、片山英一、津田周二、交野武一、山本信樹、大塚博美、太田敬、徳久球雄、田中薫、松尾宏、山内巖、石坂昭二郎、森敦彦、小沢明夫、以上一六九名

志賀重昂生

誕百年記念

この一本展

△展示目録▽

志賀重昂氏著書

日本風景論 明治二十七年初版より第十五版まで

## ▼クリシュナ氏歓迎会

初期のマナスル登山に際し、大変世話になったクリシュナ・パハドゥル・ヴェルマ氏（現在ネパール政府のセメント・プロジェクトのマネージング・ディレクター）が、此の度アジア生産性本部主催のトップ・マネージメント・セミナーに出席のため、十年振りに来日されたので、本会ではこれを機に、同氏を知る関係者有志により同氏の歓迎会を開催した。当夜はクリシュナ氏の実弟ラム君（一九五七年のアジア大会に來日、以後天理大に留学中）が流暢な日本語で通訳され、まことに楽しい一夕であった。席上クリシュナ氏は日本山岳会のエヴェレスト登山計画に協力を約束と共に、オリンピック聖火のネパール分火運動に援助願ひ度き旨の希望を述べられた。

日時 昭和三十八年十一月五日 十七時三十分～十九時

場所 麻布、国際文化会館

出席者 クリシュナ・パハドゥル・ヴェルマ、主賓の友人一名、植有恒、日高信六郎、三田幸夫、早川種三、伊集院虎一、佐藤久一朗、村井米子、深田久弥、谷口現吉、堀田弥一、交野武、藤井運平、加藤泰安、折井健一、今西寿雄、辰沼吉吉、村山雅美、斎藤健治、山崎安治、村木潤次郎、大塚博美、石坂昭二郎、松田雄一、日下田実、平山善吉、遠山一郎（通産省）

以上二十九名 （松田）

37年度・図書委員会報告

○第11回委員会 3月14日・ルーム  
○第12回委員会 4月18日・ルーム



及び重刊全集所収巻と岩波文庫版  
南洋時事 明治二〇 知られざる国々  
河及湖澤 明三〇 世界当代地理  
大役小志 明四五 (参考品)  
世界山水図説(正、統) 明四四 明治初年より「日本風景論」までの主  
世界写真図説 明四四 要図書  
地理学講義 明二二 Chamberlain, B.H., Hand book for  
明治二二 牧野 衛 撮影

# この一本展

大正一四  
大一一五

## Travellers in Japan. 3rd ed.

Rein, J. J., Japan: Travels and Researches. 1891

Bird, I. L., Unbeaten Tracks in Japan. 1885

Lyman, B. S., General Report on the Geology of Yesso. 1877

竹添進一郎 棧雲映雨詩草三卷 明二二

西徳二郎 中亜細亞記事 上、下 明一九

神谷 簡齋 登嶽記 明一九

今川 良弼 高峰之雪 明二二

高橋 省三 白山遊記 明二五

幸田 露伴 枕頭山水 明二六

高島 北海 歐洲山水奇勝 明二六

矢津 昌永 日本地文学 明二二

開拓使 北海道測量報文 明二〇

地質局 地質要報第一号 明二〇

鈴木 敏 富士國幅地質説明書 明二〇

野崎 左文 日本名勝地誌東山道部 明二七

鈴木 重武 信府統計 九卷 明一七

三井 弘篤 信濃奇蹟録六卷 明二〇

井出 道貞 日本産物志 明一〇

伊藤 圭介 武蔵之部 明一〇

徳大寺莞爾 不盡道別 明一〇

安野半之進 富士信導記 明一〇

土屋勝太郎 富士のしおり 明一〇

広重 富嶽真景 二巻 明二二

竹内 棲鳳 十二富士 明二七

志賀重昂先生生誕百年記念展 展示品要目録 (以下略)

○矢田鈴江氏出品

台湾産藤豆の大きさの丸の中に、一軸  
徳川慶喜 乃木、田辺、森、東  
郷、徳川家達氏らが、四松庵に因  
む文字を一字づつ書き添えるもの  
児玉、乃木両將軍合作詩集 一巻  
二〇三高地占領直後、柳樹房第三

## 軍司令部にての作

辭令 十一通  
明治十七年長野県中学出仕申付候  
事ほか

鈴江日記 明治二十九、三十年 二冊

四松庵招客の際のメニュー その他

○志賀富士男氏出品 一軸

大山碑(拓本)

志賀重昂氏肖像写真(桑港にて)

三河男兒歌碑(写真)

日本岳友々々員章

○入澤文明氏出品 三幅対

志賀重昂氏筆 漢詩

○小柳津宗吾氏出品 一通

志賀重昂氏 書翰

○小林義正氏出品 一軸

志賀重昂氏筆

○岡崎市役所出品

ステッセル將軍使用の銀盃

旅順開城の際、乃木將軍に贈られしもの

露兵使用の革袋(二〇三高地記念)

先生の長男富士男氏が学習院入学に際し、乃木大將から贈らる

志賀氏愛用の懐中時計

オロチオン族の女神像

寄贈申出書類

大正十四年十月志賀先生より南北亭及び附属品の寄贈申出書を額に表装したもの

以上は何れも南北亭の旧蔵品にして、加藤元一氏(会員)が岡崎市役所に乞うて出品せるもの

○加藤元一氏出品

南北亭写真(引伸) 四枚  
東天竺山世尊寺本亭写真  
南北亭目録 以上

## 38年度・図書委員会報告

○第1回委員会 6月20日・ルーム

出席者 深田、小林、徳久、大橋、小沢

議事と報告

△推選図書の検討

①この一本展「原稿の処理について、まとめて印刷したい。」

②レジスター編集経過について

○第2回委員会 9月17日・ルーム

出席者 深田、小林、徳久、大橋、鈴木

議事と報告

△ハウストン氏寄贈書の受入れ。

△推選図書について

△各冊ごとに50字程度の解題を付ける。深田、小林、徳久、大橋、鈴木、小沢の各委員で分担。

③ルーム移転に伴う図書管理の管理。

④洋書目録について

○第3回委員会 10月10日・ルーム

出席者 深田、小林、大橋、古川

議事と報告

△この一本展「開催について

②海外登山資料収集報告

現在までに報告カード12枚、写真は9隊分を受入れた。

③洋書目録原稿はほぼ完成。

④アルパイン・レジスター

まとまっているものから会報に掲載したい。

○第4回委員会 10月28日・ルーム

出席者 深田、小林、大橋

議事と報告

△この一本展「について

志賀重昂先生生誕百年を記念して氏の著書、書簡等を中心に展示を計画する。また明治初年より日本風景論出版(明治27年)までの山の啓蒙書、日本紹介の和洋書を展示する。展示場所、年次晩餐会々場。出品依頼者四十名。(係・大橋 晋)







## 穗苧三寿雄 著

う期待してやまない。  
なお巻末に本会名誉会員高野鷹蔵氏のプロフィールがくわしく記されており、これまた一読に価する。

(山崎安治)

昭和三十八年十一月十五日校倉書房発行、B6版二百二十ページ、写真図版多数、千部限定、七百元。

ができるよう記されている。

これまで未知の分野を多分に蔵していた明治以前における日本の登山の歴史が、神奈川県立金沢文庫長という立場にある著者の努力によって、一つ一つ私たちの前にときほぐされているのは何といっても有難いことである。これらの資料を整理し、著者の念願とされている「日本登山志」が一刻も早く一貫した形態でまとめられるよう期待してやまない。

たち登山者にも親しい存在となつたのであろう。この項はこの本の出る十数年前に出版された『開山略歴』と大和上行状記」というものからほとんど写しとつたものなのであったが、この一人のえらい念仏行者が苦勞して初心をつらぬき、この山のでっぺんに仏様をおまつりしたいという修行のありさまが、当時の人々の心をうごかしたのであろう。

このたび檜岳山荘の主人である穂刈さんがその檜岳山荘の、四十周年記念として「播隆」を出版された。檜の肩の小屋として親しまれてきたこの山荘が建てられてからもう四十年になるのであるから、自分の若いころの山登りを考えさせられてしまうはめにもなってしまったが、この山荘を開いたた穂刈さんがいまも元気でこのよう

な資料をまとめたことは、山荘の隆盛とともに大いによるこびたい次第なのである。

彼、播隆についてのことは、『美観』以後にもかなり見うけられたが、このごろでは昭和三十四年に金沢文庫の熊原政男さんが『登山の夜明け』という、わが国の山登り以前の山について書かれた本の中の「播隆上人等と槍岳を拓く」ならびに「信州槍岳略縁記」はまとまった資料であり、最近では会員の佐藤貢氏の『アルプスの主嘉良の佐藤貢氏の「槍ヶ岳に門次」という本の中の「槍ヶ岳にかけた播隆上人」はたのしい読物

であったことなどをおぼえているが、この「播隆」でよいと思ったことは、そんなことをぬきにしないで、あつめられるだけあつめた資料にしたがって、たくはつ僧として、先輩として、あるいは布教師として、一生をおくった人の伝説をつづっているものであり、その資料も原文のまま忠実にのせているといふことなのである。それに加えて「手記と書簡」「播隆の歌」

「遺墨と遺品の目録」があり、年譜と参考文献が付記されていることも便利なことである。写真版でのせられた資料にも「播隆上人像」「本覚寺にある文書」「古絵図」「三昧発得記」「播隆筆の名号」などは貴重なものの原型をつたえてくれる撮影であったと思う。そんな写真の中の「坊主小屋にある播隆石像」は明治の頃、上高地の嘉門次が負いあげたといわれ、戦前は完全に保たれていたの、今ではむざんに割られて上部に

「あとがき」に「槍ヶ岳とともに生涯を過ごしてきたような私が、播隆の足跡を辿ったことは何かの宿縁であろうか」ともいわれているが、わたしたちにとっては、穂刈さんがこのように槍ヶ岳の一簣料を正しくまとめておいてくれたことにまずお礼を言うべきなので

あろう。(小野 幸)

昭和三十八年十月穂苅貞雄（松本市  
六九町二三二）発行、二二〇ペー  
ジ、写真多数、限定版千部、六〇〇  
円。

## 「山日記」の刊行

「山記」一九六四年版が出た。日記欄の暦は相変らず重宝、本文の内容は毎年骨組みはほぼ同じでも多少の工夫が加わって、今年は前年度の「山の映画」、「一九六二年の遠征」などがなくなった。また「山麓交通機関」というものも特別へんびな土地を歩くのでなければ重宝するであろう。私事で恐縮であるが、して苦情を言わせてもらいうなら、視力の加減が年々「本文」の活字が小さく読みづらくなってきたように思うことだ。

ふだん座右において便覧として使うのはよい。旅に携行して、寒灯の下に掂げたとき、どれだけ判読できるか一寸心細い。

記事の内容についてとくく言う資格は私にはない。広範囲にわたる読者層、さまざまな利用方法を考えたとき、選択・編集の苦勞は想像に余りある。実用的なものを望む層もあるが、うし、抽象的要素的な面を加えてほしいと思う人もあろう。ともあれ二十九輯・継続刊行される、固定した読者層をもつ出版物であるから、必要であれば一年後でも正誤表はあった方がよいと思うがどんなものであろうか。あるいは愛読者カードを利用するのも一方法であらう。

なお『山日記の葉』一九六四年版（十八頁）が今年も発行されていて楽しい。

本文二三四頁、日本山岳会編集、若溪堂発行、定価三〇〇円

(F)

| 寄 贈 図 書 |               | (定期的刊行物) |      | 38年4月～10月 |  |
|---------|---------------|----------|------|-----------|--|
| 雑 誌 名   |               | 発 行 者    |      |           |  |
| あしな     | か 84 85 号     | 山村       | 民俗の会 |           |  |
| 気象      | 72～78号        | 村象       | 協 会  |           |  |
| 国立公園    | 159～162号 166号 | 国立公園     | 協 会  |           |  |
| 国立競技場   | 49～51号        | 国立競技場    | 会    |           |  |
| かもしか    | 12号           | 岐阜       | 登高会  |           |  |
| 京都山岳    | 4～6月号 10月号    | 京都山岳     | 会    |           |  |
| 国土地理院時報 | 27号           | 国土地理院    | 会    |           |  |
| 会山書研    | 報 67号         | 山学同志     | 会    |           |  |
| エーデルワイス | 創刊号           | 日本山書     | 会    |           |  |
| 兵岳連     | 21号           | エーデルワイス  | ・クラブ |           |  |
| 兵岳連     | 報 7 号         | 兵庫山岳連盟   |      |           |  |
|         | 7 号           | 岐阜山岳     |      |           |  |

|         |   |              |
|---------|---|--------------|
| 自然保     | 護 | 21~26号       |
| 山毛樺     | 林 | 81,83,84号    |
| 偃飯      | 松 | 6号           |
| あしあ     | 豊 | 3号           |
| D A C 報 | と | 14号          |
| 彷徨      | 告 | 19号          |
| 明峯山岳会   | 徨 | 14号          |
| 岳 A C 報 | 憲 | Vol. 33.1~6号 |
| あしび     | 告 | 16号          |
| 北大山岳部々  | き | 4号           |
| 溪部      | 報 | 2号           |
|         | 流 | 9号           |
|         | 報 | 42号          |
|         |   | 1号           |

日本自然保護協会  
広島山の会  
東京教育大山岳部  
下越山岳会  
大阪高体連登山部  
同志社大学山岳部  
早稲田大学ワンダーフォーゲル部  
明峰山岳会  
神戸岳窓会  
青山学院大学山岳部  
国学院大学山岳部  
北海道大学山岳部  
気象庁山岳部  
お茶の水女子大山岳部

# 続 飯豊あちこち

藤島 玄

その後、八月中旬に山形県小国町の基地温平を歩いた。三十七年完成の飯豊山荘は、清々しいまでに周辺が掃除してあった。これは福島県の季節小屋もそうだが、老人も居る登山小屋に限るようである。若衆が多勢居るほどだろしがない。若衆であればあるように多忙のためだろうが、自ら愚にもつかぬ多忙と称する仕事を求めている傾向が多分にある。

山荘の脇から、丸森峰尾根の先端に取付き、地神山へ直登の新道が伐開されてあった。まだ踏むに荒っぽい、飯豊温泉を迂回するより甚だ近いから、当然予想されて、あるべきはずの道である。

ブナの原生林の温平から、石転び沢の大雪溪へ取付く梅花皮沢左岸の新道も辿ってみた。沢身へ降りずかなり上を捲く道で、梅花皮大瀑のある梅花皮滝沢の落合が脚下に指呼されてうれしかった。大又沢・檜山沢合流点からやや上流の檜山沢に確りした鉄線橋の架けられてあるのを確認した。

合流点下の左岸の岩壁から、右岸へ直線を引くと、本流の中央に三角形の大岩が露出している。大

正十四年の徒渉のとき、中継点にした岩だ。この激流の中であって今も健在かと驚きであった。

九月の中旬に、杖差岳の東俣川の新登山道完工に招かれた。東俣川に営林署の車道が延長した先へ新コースを伐開したもので、将来性のある立派なものだ。カモス沢上流から取付き、千米独標、千本峰、前杖差とブナ林の頂稜を伝うもので、飯豊連峰の最北端の県境の山々が素晴らしい。

これから、カモス沢まで東俣川の左岸を行き、登山小屋が建てられると、西俣川、大熊小屋、新六ノ池、杖差岳の現コースより、短距離で優秀な景観が期待される。

九月二十二・三・四日と、第十九回新潟県国体登山コースの施設拡充を視察した。沢々の悪場は付替えて架橋し、登山小屋周辺のキヤンプサイトは拡大整備された。頂稜を逃げ、斜面の草原を踏ませた作りに容易で、歩くに美しいが危険のあるからみ道の大部分が、頂稜へ移されてあった。

今年の山の冬は駆足でやってきて一カ月も早い。杖差岳の時は息もつけない雨霰。視察行の時は、大目岳、御西岳、北岳の通過は雪であった。チングルマ・ハクサンフクロの群衆の紅い色が、降りつむ雪ににじみ、黙々と行くわれわれは、雨具の上に積る雪を何度かはらいおとした。

新築完成したばかりの御西小屋

## 沼井鉄太郎遺稿

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
登頂のすぐ後に ⑨

……アンナブルナ初登頂……

(二二五号より続く)

彼はコンデンス・ミルクを出し飲みこみそのチューブを捨てたが、それが二時間もいた頂上で彼らの残した唯一の形跡(登頂証跡)なのであった。そして斜面を駆け下りクロアールに姿を没する前に、その後の彼らにとつてのすべての喜びであり、慰めとなる頂上に最後の一べつを与えた。

生死の境を抜け切った下山と帰路に物語られた記録は、息づくひまもないほど劇的で感動的な場面ひろがりであるが、それはここに展開してみる筋合のものではない。ただフランス隊のアンナブルナ初登頂は、全遠征旅行をも含めて、ロマンの匂高い、速攻主義登山による、新たな歴史の第一頁にふさわしい感動であった。なおまた、その登頂に民族色調のにじみ出たことは多分に感じられるけれど、それは計算通り以上に成功した同国のマカルー完登の場合も同様なのである。(一九五七・一二・一八・稿)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
登頂のすぐ後に ⑩

……ナンガ・バルバット

初登頂(単独行)……

一九五三年七月三日、クレーノ・ライナーを隊長とするドイツ・オーストリア隊の一隊員ヘルマン・ブルルが、マンメリーの失踪遭難以来恐怖の山、運命の山として聞えたナンガ・バルバット(八一二五米)に長駆単独で登頂し、二日目天佑的にキャンプに帰還下山したのは、登山史上驚くべき事実であった。(因みにブルルは一九五七年ブロードピーク隊に加わって登頂し、その直後チョゴリザの試登で墜死した)

このナンガ・バルバット遠征に關しては、カール・エム・ヘルリヒコフ・アール著・横川文雄訳の「ナンガ・バルバット」(明文堂エーデルワイス叢書第一巻)があり、ディーレンフルト等の総説的ヒマラヤ書等図書雑誌に紹介されていて、そのいきさつ、行動批判も述べられたものもあるが、何といても登頂者自身の手記には力強いものがあるので、ここにはブルル原著・横川文雄訳・エーデルワイス叢書第四巻(八千メートル上と下(昭和三十年十月一日))によってみて行こう。

この隊は目的の山の峻絶な北面で、フンザ人夫の質と量の不足、

そして天候の不順とから高所キャンプの建設と荷上げがはかばかしくなく、あまつさえ高山病者続出で、全体の管理連絡は欠陥を明らかにしたようなものであった。結局ファイトを失わなかったブルルだけが、モンスーン来襲直前の最後のチャンスをつかんで、登攀隊長アシエンブレナナーの総員退却の命に抗して辛うじて納得してもらい、モーレンコップ直下にやとつった第五キャンプにオットー・ケムプターと二人きりで泊った。そして七月三日午前二時半からの単独行となったわけである。

ブルルは軽いリュックザックを背負い、雪眼鏡をかけて出発した。酸素補給器は使用されなかった。ジルバーザッテルを過ぎ去からは未知のルートに苦闘しながら頂上めがけて進んだ。天候は嵐の前の静けさであった。高度計の示す七五〇〇米地点でリュックザックを残し、テルモス、予備衣料、小旗などを押しこんだアノラックを腰にまとい、カメラを肩に、ピッケルを刀差しにして、二本のスキー・ストックを頼りに先を急いだ。この時まで背後に見えていたケムプターはジルバーザッテルからもう動かないようだった。大雪原から前峰(七九一〇米)をまいて主峰との間のコルに着いたのは午後二時、ここで興奮剤ベルグイティンと二錠のんで、悲観的形相の岩☆

と、梅花皮小屋、門内小屋も超満員である。小屋を建ててから痛感したことは、われわれの考えが甘かったことだ。小屋ができると、天幕の携行に困せず、早い者勝ちに占有し、電池歌謡曲で小間物店を揚げ、外から風雨に叩かれ、じめな思いで入ってくる遅い登山者など、招かれざる客であった。

この状態では、やっぱり外で寝ることだ。そして、山小屋は十倍くらいに増築して、追剥ぎのように片端しから巻きあげ、雑詰のような飯を食わせることだ。と、われわれは思わねばならなかった。

(三八、一〇、七)

# 十月の早池峯山・

村上金吾

釜石線の邊野駅前から大出行バスに乗る。大出から大野平開拓地を経て又一滝まではゆるいのぼり。薬師岳の登路は滝のすぐ上から左に分れるので、よほどいって見ようかと思つたが、時間が足りないようなのでやめる。薬師小屋を経て川原坊小屋泊り。無人だがよくかたついていた。無類静かな環境。月がのぼる。

翌朝は霜が白かった。小田越から早池峯の主峰にのぼる。晴天に恵まれ、残月の下に栗駒、焼石、鳥海、秋田駒、岩手山などが浮ぶ。季節が遅いからハヤチネウスユキソウなどの山特産の花も見

られないのが、少しさびしい。

頂上に約一時間。最初予定した岳側の川原坊跡におりるのを変更して中岳、鶏頭山を経て、七折滝におりにすることにした。三山縦走とかがいつていようだが私ははじめ。標識もついているが、尾根をからむ道はえんえんとつづいてい

た。鶏頭山の肩の岩場から七折滝におりる道と「岳」に出る道とが分れる。私は七折におりたが、あとで岳におりればよかったと思つた。

七折を経て大股へ出たところ、バスはすでになく宿屋もない。あきらめて大迫(おおさき)まで歩くつもりで夜道をしていると、後からきた電力会社のカーが乗せてくれ、大迫の旅館まで案内してもらった。

(三八、一〇、五・六)

へあとがき

いま早池峯山の観光開発を目途とする荒川高原コース開きの計画が遠野市あたりで進められているのは注目に値する。コースそのものは結構だが、つづいて山頂にケールくらしいかけることになりかねない。最近山を低俗化する事業が各地で行われ、東北の場合だけでも吾妻のスカイライン、蔵王のエコーライン、栗駒のヘルスラインと櫛の歯をひく悲朗報が相ついでである。この際日本山岳会あたりで山を守る運動を全国的に展開することはできないものかと思ふ。

☆稜地帯から山稜を覗き登る。

彼はいう。「いよいよ頂上直下に達した。頂上に一つの突出した岩が見える。……あとどれくらいあるだろうか？　そこまで行く力があるといいが！　この不安の念がいつまでもつきまとう。もうとても真直ぐ立ってられない。……ただ四つん這いになって僅かずつ前進する。だんだん突き出た岩が近づいて来る。……」

あのうしろに何があるだろう！　だが僕は意外な状況にほっとした。ただ一つの窪みと、ちょっとした雪の斜面、しかも数米だけの斜面があるだけだった。もうずっとと楽になった。

そしてついに僕は、この山の最高点に、ナンガ・バルバットの標高八一二五米の頂上に立った。

初登頂、それは何と午後の七時だった。究極の希いの場所に達しても、幸福感は一つも湧いて来ない、歓呼の情も、勝利者の抱く感情も覚えなかった。もう完全に参ってしまった、と書いている。十

七時間もの一歩一歩の闘いと意志の緊張努力、精魂つきはてる直前の登頂感、もう先まで登らなくてもよいという不安一掃の救われた気持ちに優先されていた。それで彼にはまだ体の余力と理智があり、自動的にピッケルを雪に突き差し、その柄にチロルの小旗を結ぶことを忘れなかった。それを前景にしての写真(本には

その図版がある)や、その他四囲の写真を取り、更にアグファ・カラー・フィルムまで装填して、疲労の極に達していたにも拘らず、正確な操作でインスブルックのクラブ仲間の頼みを果たした。またこれも約束通りパキスタンの国旗をチロルのと替えて記録写真撮影をくり返す。そしてやっと落着いての展望。

それは全く絶海の孤島にいるような想いだ。彼の付むナンガのピラミッドの投げかける巨きな影が遙か彼方の平野までのびている、としているのは彼の夕刻の登頂の真実を物語るものであろう。澄み切った空の下で彼はほっとした気持ちになる。

日没と共に酷く寒くなり、もう三十分は経ってしまったらしいので降りることにしたが、登頂の証として、シンボルとして、パキスタンの旗をつけたままの彼のピッケルを残した。また最高所の岩上にいくつかの岩塊を骨を折って積み重ねて、小さなケルンをつけた。それからもう一つの約束を思い出して二三歩とって返し、最高点にあった小石をポケットに入れて、この石は家で不安な気持ちで待っている妻にもって帰ってやるのだ、という。

こうして最終キャンプまで二日に渡る天佑的な下山となったのであるが、その精細な記録はアンナ・ブルナやkの場合以上に人の胸を

撃つ。然しそれは本篇の域外のものである。ただ序でに次の二つのことに触れておきたい。

その一つは Pervin (バルヴィン) のことである。この物質はジメチルフェネチルアミン又はデスオキシエドリンの塩酸塩で、商品名は種々あり、米国局方ではメサンフェタミン、日本ではメチルプロパミンまたはフィロポンとして知られている。中枢神経系統興奮剤で、即効優秀な薬剤ではあるが、欠点として習慣性を与え易く、一旦中毒患者となったらその禁断症状を意志のみによって脱却することができないほど恐ろしいものである。勿論わが国では禁制品となっており、原料の一つのエフェドリンまでが取締の対象なのである。

ブルはナンガ・バルバット登頂の往路に一回躊躇しながらペルヴィティン二錠摂取、帰路にも一回三錠を飲みこんだが、その良い効果は現れて元気になったらしいけれども下山に当って誰かしら自分と共にあるように感じたり、遠くの下の岩塊を人間と見まちがえたりした幻覚は、単に薬切れでなしの過労だけの影響であつたろうか。登頂感激が燃焼しなかったのも単行疲勞の極といひ切つていいだろうか。ブルの場合、その薬品に関係なしと証明されたとしても、一般的には大いに戒しめなければならぬ課題と思ふ。

以下続く





中村清太郎画

## 十月理事・評議員会

三日・ルーム

▽出席者 松方会長、三田、渡辺副会長、理事折井、山崎、辰沼、木下、古沢、松田、川上、竹田、中島、金坂、武藤、監事野口、松本、評議員青木、吉沢、交野、加藤、神谷、藤島、織内、望月、石原東京支部長。

## ▽議事と報告

①自民党提案の山荘建設について  
・自民党政調会より「人づくり」関連事業として青年婦人局で全国数ヶ所に山荘を建設したい。党としては資料経験不足のため本会に協力方要請あり、本会としては趣旨に賛同するが具体的に内容を確めたうえで、必要あれば協力する。

②ヒマラヤ委員会について  
・現在のヒマラヤ委員会は最終的にエヴェレストを検討の結果、決定。（六六年許可受付済）委員会の再編成の要あり。人選については横名誉会員、三田副会長に委任、月末までに決定する。

③支部長会議開催  
・十月五日（土）～六日（日）、神

河内（本会）山荘にて開催、東京より日高、渡辺、石原、辰沼、折井出席の予定。

## ④石原正子氏退任について

・本会事務担当の石原正子さんは一身上の都合により退任されたので後任として若村松枝さんを委嘱。

## ⑤神河内山荘使用規定（団体会員につき）について

・学校その他団体加入会員の取扱については団体会員の証明により個人会員と同格に取扱うことにする。

## 十一月理事・評議員会

七日・ルーム

▽出席者 三田、渡辺副会長、理事深田、折井、辰沼、山崎、中島、松田、武藤、木下、監事野口、評議員藤島、神谷、交野、入沢、加藤、吉沢、日高、今西（寿）、石原（東京支部長）、牧野（静岡支部長）、中田（富山支部長）

▽委任出席 川上、青木、藤本、荒巻、池田、津田、今西（錦）、川喜田、伊藤（秀）。

## ▽議事と報告

## ①年次晩餐会について

・十二月はじめ茗溪会館にて開催の予定。併せて本年は志賀重昂生誕百年に当るので、それに因んだ資料が展示したい。

## ②支部長会議の報告

・十月五日、六日上高地で開いた。

## 1 各支部より状況報告

2 ヒマラヤ登山（一九六六年エヴェレスト）について

## 3 山の自然保護について

・特に西穂ヶ岳ブル架設案に関して討議をし

(4) 支部長会議とし絶対反対を決議。

(4) 本会内に自然保護委員会をつくりたい。

・出席者 日高、渡辺、折井、山崎、辰沼、松田、神谷、野口、松本、東京支部石原、村井、東海支部須賀、石岡、富山支部木津、静岡支部牧野、秋田支部柴田、関西支部津田、甚野、越後支部藤島、石川支部池田、信濃支部高山、小里、赤羽、清水、塚原、村上、ゲスト沢田栄介（上高地レンジャー）

## ③ヒマラヤ委員会について

・現在のヒマラヤ委員会（三田、加藤、辰沼、村木、今西、堀本）を解散し、新委員を左のとおり委嘱、「エヴェレスト委員会」と改称する。

## ・新委員氏名

・横有恒、三田幸夫、深田久弥、竹節作太、早川種三、小原勝郎、交野武一、成瀬岩雄、加藤泰安、吉沢一郎、谷口現吉、望月達夫、今西寿雄、堀田弥一、浜野正男、折井健一、藤井運平、辰沼広吉（以上十八名）

・なお委員長には横名誉会員を推す。

④第18回国民体育大会（開催地山口県）「登山部門、十月二十七日



「三十一日、秋吉台」

・交野評議員が日本山岳協会理事の立場で参加した。明年度新潟県で開催に当たっては本会として十分援助したい。

## 十二月理事・評議員会

五日・ルーム

▽出席者 理事 折井、辰沼、山崎、村木、松田、川上、武藤、皆川、高橋、監事 松本、評議員 織内、交野、芳野（東京支部）

▽委任出席 松方、深田、木下、中島、望月、神谷、藤島。

▽議事と報告

①富山県登山条例案について

・右について十二月九日、虎ノ門電気ビルにて富山県主催の関係団体の意見を聞く会あり、山崎、辰沼理事に出席願うこと。

②入山に知事の許可、(四)違反者に対し一万円以下の罰金など。右条令施行の期間（冬山に限るのか、審査する責任者、また許可された者の避難に対する処理責任の範囲などの問題があると思うので、会合に出席の上詳細に検討する。

③説売新聞社スポーツ賞推進について

・本年度該当者なし。

④故高木正孝君の追悼会に弔電  
・南太平洋で行方不明になった同君（会員番号一五六九）の死亡が最近確認されたので十二月九日、神戸大学文学部追悼会にて弔電を送る。

④自然保護委員会委員委嘱について

て

・本会の仕事のひとつとして自然保護委員会（仮称）を中心に運動を進めたい。交野評議員を中心に次の理事会で発足できるように準備する。

⑤来年度理事推進について

・あらかじめ構想を考えておいていただきたい。

⑥エヴェレスト委員会について

・十二月二日委員会を開き、委員会規程を定めた。

・常任委員に小原勝郎、加藤泰安、辰沼広吉、折井健一の四氏を委嘱した。

・なお委員として日高信六郎氏は各支部長に委嘱をしたい。承認。また現存ヒマラヤ関係装備は登山技術委員会が管理を願うことを確認する。

⑦「山日記」について

・一九六四年版山日記（29輯）を十一月十七日に発行した。発行部数四万。

・十二月十日に山日記合評会を開きたい。

⑧山岳協会について

・十一月二十日、協会常務理事会に本会側から渡辺、交野、山崎三氏出席。

・海外登山委員会の海外登山処理についても同協会へ報告されたいとの希望があった。

⑨「山岳」発行について

・本文は完了。広告が準備できれば二月中には発行できる。以上

## 東京支部会務報告

十一月六日（水）役員会

一、第九回スキースクールの件  
期日 一月十二日～十五日

（三泊四日）

場所 山田温泉、募集人員 七

〇名

会費 一般 六、〇〇〇円  
会員 五、八〇〇円

二、十一月第三水例会の件  
講師 冠松次郎氏

演題 「黒部の今と昔」

三、十二月例会Xマスパーティ  
会費 三〇〇円

交換プレゼント百円程度持参  
四、富士山講習会の件

出席者

安彦、坂倉、中、鈴木郭、鈴木伊、小野、野萩、倉知、富田、片桐、錦織、芳野

## 〇近ごろ土曜会のこと

山岳会の会報には、私的なことはあまり書かない仕来りのようであるが、おめでたい話はよいと思う。

神谷恭氏が去る十月金婚式を挙げられたので十一月二日、ルームに御夫妻を迎えて有志相集いお祝いの会を開いた。会するもの二十四名。余興がいろいろあった中で、朝井一男氏のハーマニカ独奏「金婚式」が出色の出来で、一同大いに感心。また若い方を代表して松田雄一氏夫妻に坂倉さんが加わってアルプスの唄を歌ったのも和やかでよかった。

(F)

## 日本山岳会

来室者  
名簿から(2)

古沢 肇

△前号よりつづく△

## ◎昭等二十九年(一九五四)

○2月19日 京大アンナプルナ隊  
歓迎会 伊藤憲、今西寿雄、別宮  
貞俊、松方三郎、堀田弥一、ほか。  
○2月21・22日 アメリカ、マカル  
ー遠征隊員(九名) 歓迎会。  
近藤茂吉、植有恒、島田興、成瀬岩雄  
村山雅美、谷口現吉、ほか。  
○2月22・23日 定款改正委員会  
○3月28日 ジョントレーラーほか  
(AAC)

○3月7日 マナスル第三隊出発  
○3月19日 大悟法利雄、同弘子  
○4月24日 会員総会  
○4月28日 ヒマラヤ委員会  
○5月20日 フォスコ・マライニ  
○6月6日 名誉会員を囲む会  
武田久吉、高野鷹蔵、辻村太郎、  
鳥山錦成、近藤茂吉、植有恒ほか  
出席者二十四名。  
○6月19日 堀田隊長ほか六人婦  
国歓迎パーティ、三十一名。  
○6月17日 第一六一回小集会、

十七名。  
○6月20日 ウィリアム・グイド  
ル(ダトマウス・アウティング・クラ  
ブ)、沢田ユリ子  
○7月26日 加藤、村木隊員婦  
国  
○11月28日 富士北口六合目雪崩  
のため日、慶、東大生ら遭難。  
○12月6日 日大遭難、塚本玄門  
氏ら八名。  
○12月10日 慶大石川七郎氏他二  
名富士遭難につきあいさつのため  
来室。  
○12月8日 フレッド・スパーク  
ス。  
(注) この年の痛ましい事故は富士の  
遭難であった。  
なお伊藤憲氏は三十一年に逝去。  
× × ×

## ◎昭和三十年(一九五五)

○1月14日 ウィリアム・グイド  
ル(AAC)、中屋健一ほか  
○3月3日 デビッド・コリンズ、  
小原勝郎ほか  
○5月26日 ウィリアム・グイド  
ル、チャールズ・Hブラウニング  
○6月10日 日大捜索協力御礼の  
ため参上、日大山岳部長瀬能重  
礼、OB戸村貞男、安田敬三、遭  
難者遺族高野定次郎、細川小作、  
塚本玄門、石井辰五郎、上田茂  
正、小松嘉助。  
○9月8日 名須川渡。  
○10月2日(日)「フランス登山  
家を囲むつどい(於松平ホテル、出  
席者四十名)後の感想会。  
○10月2日 婦人部村井米子、河

野弥生、豊中貞子、坂倉登喜子、  
山本和子、木ノ内則子ほか。  
○11月24日 メキシコ人一名  
(注) 名須川渡氏は三十一年逝去。  
◎昭和三十一年(一九五六)  
○4月14日 マナスル隊歓迎会  
(第三次)  
○4月30日 W・Hアーノルド、  
(AAC、シャトル)、伊藤洋平  
○5月18日 マナスル登頂を祝  
う。林誠治、坂倉登喜子、山口国  
俊、マ新旧役員交歓会兼マナスル  
登頂祝賀パーティ、別宮貞俊ほか  
二十三名。  
○6月22日 マナスル隊帰朝  
○9月19、20、22日(土) ギャ  
ルツェン・ノルブ  
○10月3日 Navit Parich(ネ  
パール)、嶋原啓佑ほか。  
○10月13日(土) ギャルツェン・  
ノルブ  
○10月20日 Navit Parich、松  
岡洋子  
○12月29日 土曜会忘年会  
(注) 書記津軽不二雄氏は病気のため  
六月退職、後任に北河原景寿氏が就任  
した。会員によるルーム当番制はこの  
年廃止された。

## ◎昭和三十三年(一九五七)

○4月10日 サミウエル・ブラヴ  
アンド、藤島敏男、三田幸夫。  
(注) スイスアルプスに於けるわが  
日本の愛する友たちとスイスアルプス  
における愉快な日を思い出して、とい  
う意味のインメモリアムあり。  
○4月23日 Gaston Rebuffat(ギ  
ヤストン・レブファ)、別宮貞  
俊、折井健一、辰沼広吉。  
○5月9日 マナスル登頂一周年  
の集い 三十人。  
○10月26日 J. N. Marchan(イ  
ンド)、三田幸夫ほか。  
◎昭和三十三年(一九五八)  
○2月17日 ライト・フォルト  
(注) エドワード・ライト・フォルト  
氏(スイス山岳会、エヴェレスト隊員)  
は国連軍医師として韓国に滞在、その  
間しばしばルームを訪れた。3月27日、  
5月29日にも署名があり、日本のアル  
ピニストに対する私の親愛なるあい  
さつとともに、と記されている。  
○5月9日 マナスル登頂二周  
年、十四人。  
○5月21日 チョゴリザ行、藤平  
正夫氏歓迎会、太田敬、折井健  
一、石原憲治ほか。  
○6月19日 早大アフリカ探検隊  
歓迎会(関根吉郎、吉阪隆正、後  
藤薫子、鈴木耿子)、十三人。  
○9月3日 コロネルA・N・カ  
ンナ(在京印度大使館付武官)  
・JACの精神がすべての登山家に  
対するインスピレーションであること  
を祈る、と記載。  
○9月19日 別宮会長急逝(午前  
一時)  
(注) 別宮氏の署名は9月8日、12日  
にある。なお座談会の録音がルームに  
保管されている。  
◎昭和三十四年(一九五九)  
○1月16日 A・Nカンナ  
○5月9日 マナスル登頂三周年  
記念、三十二名、A・Nカンナ大  
佐ほか。  
○6月16日 Peter Seidel(カナ  
ダアルパインクラブ)  
○6月25日 沼井鉄太郎  
○9月2日 国体委員会  
○10月14日(水) 第二百回小集会  
(国際文化会館)  
○11月10日 ベルー・アングス、  
竹田吉文、竹内桂男。  
○12月16日 福岡大学加藤秀木、  
阿部盛明、尾石光石、渡辺幸生。  
○12月16日 藤本九三氏送別会、  
十三人(注) 藤本氏はこの後関西へ  
帰任された。  
沼井鉄太郎氏は七月二日急逝。  
◎昭和三十五年(一九六〇)  
○2月6日 土曜会新年会(旧歴  
による)  
○3月14日 ドイツ人、福岡孝  
行、麻生武治。  
○3月17日 T・Lスケルトン  
(本会員、米カリフォルニア在住)  
○7月30日 Richard MacGowan  
夫妻(A・A・C、シャトル)  
○9月12日 カルカタ人、三  
田幸夫  
○12月3日 Dario Monna(ナ  
マ大学々生、翌三十六年一月十四、十  
七日にも来室署名あり)  
○12月13、16日 Norman Hardie  
(注) 十三日には深田久弥、折井健  
一、佐藤テル、川井耿子、後藤薫子、  
田村協子の諸氏、十六日には神谷恭  
樹、近藤茂吉、松方三郎、小原勝  
郎、成瀬岩雄、大塚博美氏の署名あり  
◎昭和三十六年(一九六一)  
○1月28日 Fred N. Lakin  
Tasmania, Australia National

ルーム来室者数統計(2) ( ) 内西歴

| 昭和 30 年<br>(1955) | 昭和 31 年<br>(1956) | 昭和 32 年<br>(1957) |
|-------------------|-------------------|-------------------|
| 1月 122            | 1月 134            | 1月 99             |
| 2月 119            | 2月 186            | 2月 131            |
| 3月 131            | 3月 150            | 3月 126            |
| 4月 177            | 4月 170            | 4月 165            |
| 5月 196            | 5月 199            | 5月 147            |
| 6月 208            | 6月 197            | 6月 176            |
| 7月 191            | 7月 170            | 7月 131            |
| 8月 208            | 8月 104            | 8月 123            |
| 9月 227            | 9月 203            | 9月 131            |
| 10月 141           | 10月 171           | 10月 118           |
| 11月 122           | 11月 126           | 11月 135           |
| 12月 132           | 12月 156           | 12月 138           |
| 合計 1,974          | 合計 1,960          | 合計 1,620          |

| 昭和 33 年<br>(1958) | 昭和 34 年<br>(1959) | 昭和 35 年<br>(1960) |
|-------------------|-------------------|-------------------|
| 1月 113            | 1月 139            | 1月 155            |
| 2月 140            | 2月 117            | 2月 149            |
| 3月 133            | 3月 136            | 3月 155            |
| 4月 154            | 4月 138            | 4月 157            |
| 5月 154            | 5月 211            | 5月 171            |
| 6月 168            | 6月 208            | 6月 186            |
| 7月 114            | 7月 184            | 7月 213            |
| 8月 105            | 8月 119            | 8月 66             |
| 9月 172            | 9月 203            | 9月 127            |
| 10月 157           | 10月 202           | 10月 162           |
| 11月 142           | 11月 178           | 11月 117           |
| 12月 192           | 12月 171           | 12月 145           |
| 合計 1,744          | 合計 2,006          | 合計 1,803          |

| 昭和 36 年<br>(1961) | 昭和 37 年<br>(1962) | 昭和 38 年<br>(1963) |
|-------------------|-------------------|-------------------|
| 1月 167            | 1月 138            | 1月 120            |
| 2月 168            | 2月 198            | 2月 142            |
| 3月 139            | 3月 181            | 3月 145            |
| 4月 185            | 4月 248            | 4月 179            |
| 5月 150            | 5月 155            | 5月 166            |
| 6月 147            | 6月 203            | 6月 166            |
| 7月 106            | 7月 160            | 7月 120            |
| 8月 125            | 8月 116            | 8月 119            |
| 9月 130            | 9月 176            | 9月 182            |
| 10月 162           | 10月 181           | 10月 177           |
| 11月 140           | 11月 212           | 11月 202           |
| 12月 136           | 12月 157           | 12月 155           |
| 合計 1,755          | 合計 2,125          | 合計 1,873          |

Park. 吉沢一郎

○2月8日 孫慶錫(韓国)

○4月22日 会員総会、四十六名

○4月27日、5月11日 Paul Berger(インスブルック・奥太利山岳会)

○5月11日 大阪市大ラント・リルン遭難。

○6月24日 有志閑談会(六義園、三十三名)。

○7月29日 ゴパール(カトマンズ)

○9月11日 高校登山反省会(立山)

(注) ルーム管理担当の書記北河原景寿氏は一月七日退職、後任として吉野昇氏が就任。

◆昭和三十七年(一九六二)

○1月30日 吉沢一郎氏アデス報告小集会

○2月23日 周廷旺(台湾省登山会)

○2月24日 周廷旺ほか四名(同)

○3月1日 周廷旺(同)

○4月5、18日 ロイト・フォルト

○4月13日 中華民国台湾省山岳協会訪日友好登山隊、蘇樟燭、余初雄、紀林全、莊國章、陳建地、鄭丁塗、曾耀麟、郭光仁、林陳查、郭林阿却、鄭清玉、以上12名

○4月21日 会員総会五十五名。

○4月23日 Robert Cugeler

○6月30日 蘇梅燭一行帰国(イタリヤ)

○10月25日 高橋照、ビックホワイドピーク報告小集会

○10月27日 瑞典山岳会員一名、I. SLETTENGREN Technical Manager, Pullnaxas Gothenburg, Sweden. 島田翼

○11月8日 Paul Bechal(アイルランド)、折井健一、芳野越夫。

○11月19日 マライニ・フォスコ(北海道旅行の自作スライドを上映)

(注) 高木正孝氏(南太平洋で死亡)の署名は1月4日、4月13日にあり、六月七日理事会に關西から上京出席しているが署名は見られない。

◆昭和三十八年(一九六三)

○1月12日 裏日本に大雪降る

○1月26日 依然交通麻痺

○2月2、6日 F. L. Stammbarger(マニヘン)

○3月2日 現地小集会(白骨温泉)

○4月20日 会員総会六十七名。

○4月30日 神戸大ボリビア・アデス登山隊金井健二他五名出発(あいさつ)

○9月1日(日) 米国エヴェレスト隊シュルパ五名、ナワン・ゴムブ、アングワ・4号、ニマ・テンシン、イラ・ツェリン、ギルミ・ドルジェ

○10月16日(三水会) 「ヒマラヤ周辺の動植物」春田俊郎氏

○10月26日 孫慶錫(韓国)

○11月16日 シャルプ(都立大、大阪府立大)、サイバル(同志社大) 登頂を祝す

○11月20日(三水会)、「黒部の今と昔」冠松次郎氏

○11月30、12月2日 登山技術講習会(富士山北口)(東京都支部)

○12月3日(土) 年次晩餐会

○12月18日(水) 東京支部クリスマス忘年会

○12月21日(土) 土曜会忘年会

(注) 11月三水会、12月支部忘年会などの集りは、当ルームにおけるこの種の集りの最後となる模様のためいづれも盛会であった。

以上で十四年間にわたるルーム日誌からの大雑把な抜萃を終る。前号①に書きおとしたこと、また誤りを訂正しておきた。

ルームの上練式は昭和23年12月29日、設計施工は三友土建(加藤藤安氏)。同二階の改装は昭和26年2月である。土曜会のはじまりは自然発生的に、と記したが、会員有志五人(藤島、成瀬、田辺、小原、神谷氏ら)によりはじめられたことがわかった。このことについては別の機会に記したい。

なお署名は残されていないがルームの小集会に昭和二十七年ごろ池田弥三郎氏、折口信夫(親近者)氏が相づいて招かれたこともあった。多田等親氏も来室されている。

本稿のとりまとめについて山崎安治、藤島敬男、日高信六郎その他の諸氏の御助力を仰いだことを記してお礼申上げた。

## ハブリー中佐死去

一九二二年の第一回エヴェレスト遠征隊のリーダーであったチャールス・ケネス・ハワード・ハブリー中佐が去る九月二十日アイリッシュ・レバブリックのマリンガーで死去した。八十才であった。

## 吉田 竹志氏

会員番号(九五二)

昭和三十八年十二月二十九日逝去

## ▲事務室異動

石原正子さんは九月三十日を以て退職、若村松枝さんが後任として十月一日より執務することになった。

## ごあいさつ

拝啓 爽秋の折から御健勝のことお慶び申し上げます。私こと、この度日本山岳会を退職致すことになりました。在職中は公私にわたる一方ならぬ御世話様になり有難く厚く御礼申し上げます。今後共によろしく御指導賜りますよう御願い申し上げます。

御目もじのうえ御挨拶致すのですが、書面に於て失礼致します。末筆ながら皆様の御健康と日本山岳会の御発展とをお祈り申し上げます。

昭和三十八年九月三十日

石原正子

昭和三十八年十二月二十五日発行

東京都千代田区  
神田駿河台四ノ六  
発行所 社団法人 日本山岳会  
編集者 古 沢 肇  
電話 神田区 八五二番  
振替口座東京 四八二九番  
頒価 二十円  
東京都港区赤坂池田五番地  
印刷所 株式会社 技報堂